

シノドスへの歩み みことばと共に 聖霊降臨 C 年

小西広志

2022年6月5日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当の小西広志神父です。今日は2022年6月5日、聖霊降臨となっています。今日の三つの朗読の箇所をシノドスの教会の観点から読んで味わってみましょう。

祈る弟子たち

第一朗読は『使徒言行録』から聖霊降臨の様子箇所の箇所です。先週の主の昇天の出来事後の様子を伝える記述の中につぎのようにあります。「彼らは町に入ると、泊まっていた高間に上がった。それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。彼らはみな、婦人たちや、イエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、心を合わせてひたすら祈っていた」(1章13-14節)。このようにマリアさまと一緒に祈るお弟子さんたちの姿が聖霊降臨の出来事的前提としてあるのです。マリアさまを中心に祈るお弟子さんたちの様子をこころにとめておきたいものです。

そうしますと、第一朗読の冒頭のことばが生き生きとしてきます。「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると」(2章1節)。一つに集まっていたのは祈るためだったのです。もともと五旬祭のお祭りは、小麦の収穫の初穂をささげました。この祭りには、イスラエル人はみな、神殿に参詣する義務があったので「巡礼の祭り」とも呼ばれました。いわゆる「収穫感謝の祭」に加えて、後代のユダヤ教では、この日にシナイ山で十戒が与えられたという歴史的意味を与えて、律法記念日として守られていたようです。つまり、モーセの律法(十戒)がすべての民のために七十の言語で与えられた日と考えたのです。そこで各国に、各地に分散していたユダヤ人たちが聖地巡礼の「宮もうでをする日」でもあったといわれています。外では巡礼客が集まってきてごった返している。しかし、家の中、おそらく「高間」と呼ばれるところでは、お弟子さんたちがマリアさまと共に祈っていたのです。こういった場面の中で聖霊は降るのです。

アッバ、父よ

今日の第二朗読には、「この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです」(15節)とあります。聖霊がもたらす恵みの最たるものは、イエスさまがそうであったと同じように神さまに対して「父よ」と呼びかけられることができることです。しかも親しみをこめて「アッバ」と呼びかけられることです。「アッバ」

は幼児語です。子どもが信頼と親しさを込めて父親に呼びかけるときの言葉です。イエスさまが主の祈りを教えてくれたときも「父よ」（ルカ 1 章 2 節）で始まりました。おそらく、イエスさまは「アッパ」と呼びかけて祈り始めたのでしょう。また、ゲッセマニの園での祈りもそうでした（マコ 14 章 36 節参照）。

守る、思い起こさせる

「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」（ヨハ 14 章 15 節）と今日の福音朗読の冒頭にあります。また、「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る」（23 節 b）ともあります。「守る」はギリシア語でテレーオーですが、もともとの意味は「囚人たちを監視して見守る、見張る」だそうです。さらには「あることのために何かを保つ」の意味もあるそうです。そして、「教えなどを遵守する。守る」の意味もあります。今日のイエスさまのことば「わたしの掟を守る」、「わたしの言葉を守る」は、互いに愛しあいなさいというイエスさまの掟を遵守するという意味でも理解できますし、イエスさまの掟をここに留めておく、保ち続けていくとも理解できると思います。しかし、掟は人を縛りつけるものではありませんし、救いの条件でもありません。ですから、今日の福音の箇所は、イエスさまからの呼びかけである互いに愛しあいなさいをこの深いところに保ちながら、それを実行できるように生きていくということを指すのではないのでしょうか。そのために「父は別の弁護者」、すなわち聖霊を送ってくださるのです。

福音朗読の最後のことば「わたしが話したことをことごとく思い起こさせる」（26 節）は、お弟子さんたちが忘れていたイエスさまが語ったことばを思い出していくという意味だけではなく、むしろイエスさまのことばと行いにこめられていた深い意味に気づいていくという意味でもあるでしょう。そうしますと、お弟子さんたちは聖霊の働きを通じて、イエスさまの想いを知るようになるのです。その想いとは「互いに愛しあいなさい」という掟にまとめることができます。こうして、お弟子さんたちはイエスさまの掟をここに留めながら歩み始めるのです。

まとめ

マリアさまを中心に祈り続ける共同体の中に聖霊は降りました。このように聖霊は人々の「集い」の中に働かれるのです。ですから、聖霊は教会という「集い」におられます。聖霊のめぐみはたくさんあるでしょう。パウロも『ガラティアの信徒の手紙』で「霊の結ぶ実はいは愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実」とまとめています（ガラ 5 章 22 節）。しかし、そのめぐみは共同体を通じて、一人ひとりに与えられます。共同体を離れたところで、自分の想いだけで聖霊のめぐみを願ったとしても、それは的外れなものになりかねません。逆に共同体のなかで聖霊のめぐみをいただくわけですから、「あの人よりわたしは霊的に優れている」とか「わたしの方が聖霊のめぐみをたくさんもらった」と比べてはならないのです。

それではまた来週